



多摩市立瓜生小学校

学校だより

平成29年度 第9号

平成29年11月30日

読書と想像力

校長 吉田 正行

11月10日、11日に実施した学芸会では、多くの方々に称賛の拍手をいただいたことに感謝申し上げます。子供たちはこの行事に真摯に取り組むことで多くの学びがありました。自分の素晴らしさや良さが分かること、友達の頑張りを認めること、そして一つのことを友達や先生と協力して成し遂げる達成感などです。その裏にはご家庭での多くの支えがあったことと思います。本当にありがとうございました。

さて、学芸会を通して子供たちが想像力を働かせ、生き生きと表現することの素晴らしさに感動された方も多くいらっしゃったと思います。しかし、これらの力は一朝一夕に身に付くものではありません。家族や友達とのコミュニケーション活動や体験活動、そして読書活動が想像力を育てる貴重な場となります。

瓜生小学校では11月15日から24日までを読書週間として、様々な取組を実施し、読書の推進を図ってきました。①プラス1キャンペーン（通常2冊が3冊に）②大型絵本読み聞かせ③図書委員企画（期間中、本を返しに来るとイベント発生）④トショモ（通常より1冊多く借りられる券）を手に入れよう！などです。読書の習慣によって「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」が身に付くと言われています。

また、様々な社会問題の背景として、家族のコミュニケーション不足が一因にあると指摘されています。

親と子の絆を結ぶ一つの方法に『うちどく（家読）』があるのをご存知の方も多いことでしょう。本は親子や家族のコミュニケーションを図るのに最適なツールです。本には人の考えや知識が結集しています。子供が読んだ本を「ちょっと貸して」と借りて親が読んで、読み終わったら「私はこう思ったけれど、あなたはどうだったの？」と尋ねたり、子供たちが読んでいる本について質問をして、一冊の本を話題にして親子で会話のキャッチボールをしたりすること、これが『うちどく』で、難しいルールはありません。「本を通して家族でもっと会話をしよう」が第一の基本なのです。読書好きになるには、自分が興味をもった本を読むのが一番の道です。しかし、“食わず嫌い”にしていたジャンルや作家の本を人に勧められて読んでみたら、意外と面白かったというような経験はないでしょうか。「親は歴史好きだけれど、子供は歴史が苦手な話で弾まない」そんな時も『うちどく』が効果的です。本屋さんで子供が好きな本と一緒に探し、おうちの方が好きな歴史と共通の話題を見付けます。例えば「昆虫」だとすると、昆虫好きな子供と昆虫探しの旅の計画を立ててみます。ちなみにこの時に使ったガイドブックも『うちどくの本』になります。旅先を決めたらその土地にゆかりのある歴史人物について話します。その話に興味をもってくれたら一歩前進です。子供が人物伝や歴史小説を手取るきっかけとなるはずですよ。

多くの本と触れ合うことで世界は広がり、子供のもつ可能性はどんどん広がっていきます。単なる知識や情報だけでなく、本から学べることは数多くあるはずですよ。これからも読書の面白さを味わわせる取組を行い、想像力を育んでいきたいと思っています。



読書活動を盛んにする取組